

心敬と宗祇——その連歌美の構成—— (その一)

A Structural Comparison of Shinkei's and Sōgi's Linked Verse Part 1.

池 田 重

Tadashi Ikeda

従来連歌作品は、伊地知鉄男氏によっても言われているように(「宗祇」)、どの作品を取り上げても同一基調の上に立つ、同一の美的情趣を表わしていると考えられてきた。然しながら、いま心敬と宗祇という、連歌史におけるピークに立つ二人の作者を考えてみると、彼等の説く連歌論にして、またその作品自体にしても個性的な面での相違が見出されるのである。そして特に彼等の連歌論については既に多くの研究者によってその特質が論じられているのであるが、百韻という作品そのものについてはまだ十分その個性的な面の分析がなされていないように思われる。

私はここに心敬と宗祇の連歌作品として、その独吟百韻を取り上げ、両者の百韻のもつ特質を明かにしてゆきたいと思う。

ところで心敬と宗祇の連歌作品を比較検討する場合、作品としての百韻と、連歌の制作についての態度なり方法なりを論ずるところの連歌論という、いわゆる理論と実際の面から考えてゆく必要がある。はじめにどのような百韻を取り上げるかであるが、ここに留意すべきことは、いかなる作家といえども作家としての成長は不断に行なわれているのであって、単に漠然とその作品を比較することは誤りである。従って私は次のような態度をとることにする。

心敬の場合。心敬は応永13年に生まれ、文明7年70才で歿しているが、40才前後より連歌師の経歴も明らかになっており、作品も残されている。いま現存する独吟として一つ知られている山何百韻が国会図書館に蔵せられているが、これは恐らく応仁元年、62才の心敬が都を出て伊勢神宮に参籠、法楽千句を催した後、伊勢から海路関東に向い、富士、鎌倉を経て武蔵品川に着いた時に詠じた独吟と言われている。「吾妻下向発句草」には「武蔵品川にて」として

郭公きゝしは物か富士の雪

とあるのは、この独吟百韻の発句である。

62才の心敬は既に生涯での中心的な連歌論書「ささめごと」を著しており、また後土御門天皇即位の折、連歌会に招待されたり、管領細川勝元の一座に加わったりして連歌師としてゆるぎなき地位にあったのである。そして、かかる円熟した心敬の独吟百韻はまた心敬の連歌百韻の中でも一つの典型でありえたであろうと考えられる。特に連歌が多数の連衆によって協同制作される場合には、他人の前句によって自己の独自の発想が制約されるのであるが、独吟の場合は心敬の常に構想している、いわば理想としての連歌百韻の体系が現われていると考えられる。よって私はこの山何百韻をもって心敬の最も円熟した手腕を見うるものと考えたい。

次に宗祇の場合について、心敬同様に独吟を取り上げることにはしたい。宗祇の独吟は小西甚一氏「宗祇」の宗祇略年譜その他を見ると最初の寛正2年(41才)の百韻から明応8年(79才)

の独吟何人百韻までいくつか主要なものを容易に数えることができる。

寛正 2 年(41 才)	独吟何人百韻
寛正 6 年(45 才)	独吟名所百韻
文明 2 年(50 才)	独吟名所百韻
文明 3 年(51 才)	独吟三島千句
文明 8 年(56 才)	春日左抛社法楽独吟百韻
明応 4 年(75 才)	淀渡百韻
明応 5 年(76 才)	本式連歌何人百韻
明応 8 年(79 才)	独吟何人百韻

以上にあげた独吟がおおよそ宗祇の独吟の代表作と言ってよいであろう。この中で、明応 4 年（と考えられる）淀渡百韻には別に「淀の渡」として知られている宗祇の連歌論書があり、それはこの淀渡百韻の付様を句毎に説明したものであり、宗祇の百韻連歌に対する構想・付け様が最もよく現われている百韻だと言うことができよう。しかも宗祇は既に文明 14 年（64 才）の宗伊との「湯山両吟」、長享 2 年の肖柏、宗長との「水無瀬三吟」、延徳 3 年の肖柏、宗長との「湯山三吟」というような宗祇自身においても、また連歌史においても特筆すべき百韻を賦しており、かつこの「淀渡百韻」を作ったと考えられる明応 4 年には「新撰菟玖波集」を編纂しており、この時は正に宗祇は連歌師として最も円熟した境地にあったとすることができる。

かくして私は、ここに心敬の独吟「山何百韻」（国会図書館蔵、「古代連歌集」所収）と、宗祇の「淀渡百韻」（静嘉堂文庫蔵、連歌集書に拠る）の両百韻を取り上げることとする。

次に私は、この両百韻の構成を分析するに当たって、この百韻の前後に成った心敬と宗祇の中心的な連歌論を参考としてゆきたい。

二

心敬は連歌史においても、また中世文学史においても一つの高峰たるを失わない。俊成以来狂言綺語と言われながらも捨て切ることの出来なかった文芸に対し、末世というのっぴきならぬ人間存在の終末に落ち込んだ人間の救済との対立、その矛盾への対決を迫られて来た中世の作者たちの苦悩を身をもってくぐりぬけんとし、連歌もまた仏道への階梯であることを行証したことは特筆されねばならない。そのことはまた中世文学史においても、中世文学の一つのあり方を示すものとして、即ち方丈記の長明から徒然草の兼好に継承される隠者文芸をその究極の境地にまで導いたものとして、更に心敬以後、宗祇、近世の芭蕉に到る隠者的な生き方の伝統の新たな源となったものとして重要な位置を占めるものと言うべきである。

いま心敬の連歌論書を通じてみうるその連歌論の特質は、上述したごとく連歌もまた仏道修行の一階梯であるということである。例えば彼の主著「ささめごと」において仏法を修行して仏の道を探ねることも、歌、連歌の工夫の中から悟得した道と変わるところがないと説いている。

「仏法を修行して実の仏を尋しらんにも、歌道を工夫して明らかなる所を覚らんにも、いかなるかたちを実の仏、いつれの姿を至極の歌、連歌と定侍らん。心はおろかなるべくや。実の仏、誠の歌とて定れる姿有べからず。たゞ時により事に応じて、感情徳を顕すべしとなり」（「ささめごと」）

さらに心敬は

「句は教、意は理なり」（「ささめごと」）

「心外法あれば生死に輪廻し、一心覚知すれば長く生死をすつといへり」(「ささめごと」)
と、慈恩大師の言を引いて連歌の道をとくのである。

この言葉によってもわかるように、心敬は真実、誠を求める心、その心がすなわち法として
教えとして言葉に現われるのが句であって、このように法即ち心、心即ち法の境に入ること
によって生死を離脱することができるというのである。

また心敬はこの仏道に帰一せんとする立場からは当然和歌と連歌との一致を説くことにな
る。「老のくりごと」には、

「連歌と歌と各別の道にとりおける好士世にみちて侍り。うたてきことの最一なる歟。うる
はしくえんにまなべる好士の心には露ばかりもかはるべからず」

そしてこの歌、連歌の一致論は、連歌を説く場合にその風体論、表現論にも現われてくるの
である。「所々返答」には、

「さしあひ、きらひ物などこそ侍れ、上下のくさりざま露ばかりも玉しひ歌にかはり侍らば
連歌にてはあるべからずや」

と言っている。ここに心敬の連歌を見る場合、いかなる程度にその理論が実現されているかど
問題なのであるが、然し猶その連歌の風体論、表現論と区別しえない和歌の風体、表現観を顧
る必要がある。それを端的に言えば師正徹における新古今集への憧憬を継承しているというこ
とである。即ち、「ささめごと」において心敬は正徹が古人の歌を学ぶために胸中に置いて案ず
べき歌の例としてあげた源信明の和歌をあげ、

「古人の歌ををしへ侍に、この歌を胸に置いて歌を案じ給へといふ。源信明歌、

ほのぼのと有明の月の月影に紅葉吹おろす山風

是もえんにさしのび、のどやかにして面影余情に心をかけよといふ成べし。此道にいたらん
輩は、先えんをむねと修行すべき事といへり」

これによってみるに、心敬は正徹の新古今憧憬の幽玄観を、えん(艶)なるものとして表わさ
れる情趣において捉えていると言えよう。このことは「ささめごと」の、

「古人の幽玄ととりおけるは心を最用とせしにや。おほやうの人の心得たる姿のやさばみ
たる也。心のえんなるには入がたき道なり」

によっても明かであろう。

しかし心敬は「えん」なる特色をもつ幽玄のみを唯一の風体としたのではなく、「ささめご
と」には連歌十体として次の体をもあげている。即ち幽玄、長高、有心、濃句、麗句、面白体、
可然体、一節体、写古体、強力体などである。

かかる風体論に対して心敬の連歌論を通して究極的に知りうる境地は「ひえさび」、「ひえや
せ」たる境地であった。

「こと葉は心の使と侍ればむねのうちさむく清からでは作えんなるべからず」(私用抄)
また、

「ある人の歌をばいかによむべき物ぞと尋はべれば、枯野の薄、有明の月とよみ給へといへ
り。是はいはぬ所を心にかけ、ひえさびたるかたをさとしれとなり」(「ささめごと」)
と正徹のことばを引いて論じてもいる。そしてこういった所説は心敬の連歌論にいく度も現わ
れているのである。

「其上は文曲、ひえやせたるはいはぬ最尊のことなるや」(「所々返答」)

「こほりばかりえんなるはなし」(「ひとりごと」)

「さかひ入はててはふけさびたるかた最尊なるべしとなり」(「老のくりごと」)

以上のごとく心敬の説く連歌の風体、「えん」という内面化された浪漫的傾向をもつ幽玄の

風体は、「ひえ」「さび」たる枯淡、静寂の境地から生れるものであったのである。そして、心敬の表現論は終局的にはその風体論を実現するための技法なのであって、「心付ならぬ句あるべからず」（「苔蘚」）と説くごとく、それは結局ひえ、さびたる境地を生むための暗示的、象徴的な手法とでも言ってよいものであった。前句をいかにとるかが問題となるとき、心敬は言葉によってとらず、心によってとるのである。前句の心に対し心をもって答える付け方である。そしてまた心敬は心付を強調する結果、「入ほが」な句や「秀句」を嫌うことにもなるのである。

つまり心敬は狂言綺語と呼ばれる連歌に生死を離脱すべき法としての心求め、単に言葉によって付ける寄合を排し、仏道の深遠な境地として一念の無常に通ずるとき幽玄にして寂莫たる味わいを求めたのであった。述懐や恋や旅の句にしてもそれは同じであった。次の言葉は連歌についての心敬の悟りともいうべきものが現われている。

「工夫修行とて、あながちに境はるかに侍らず、唯艶に情深く、此道より世間の夢中、まぼろしをも悟しり、述懐、恋、旅、無常の句などをも、其事になりかへり、その心になりはて、一粒の涙をも、一念の無常をもすゝめ侍らんためと、偏に心をも沈め人間の色欲をもはなれ、当来の一大事をも悟りしり、思ひいれ侍らむのみなり」（「所々問答」）

宗祇の場合。宗祇の連歌論は多くの連歌の好士の実際の要求によって指南書として書かれたものであることが特徴である。もちろん心敬の場合にもそういう指南書の傾向はまぬかれないが、宗祇の場合は、心敬のような抽象的で高邁な連歌理論をふりかざすものではなく、既往の連歌論を受け継ぎつつ、その目ざしたところを実作において示し教えようとしたものだと言えるであろう。

いま宗祇の連歌論を通じて見ると、結局おほらかな格調をもった優美な情趣を求めているのだと言えることができる。宗祇は「宗祇初学抄」において、

「連歌は先世上の雑談の返答をなすに似たり。さても昨日の風はいかめしく吹つるかな、と侍らば、さこそいづくの花も残らず散つらめ、などと返答したるやうに有べきや。又至極の後は西といへば東と答る様に句をなす物也」

とあり、また、

「詞にはこまやかにとりあはずして、おほやうにいひなして心よくつけ侍り」（「老のすさび」）

と述べているが、このような付合の態度は宗祇の連歌の所々に見うけられるのであり、また連歌の一座、および面^{おもて}の付合の進め方については、それぞれ「宗祇袖下」に、

「抑、一座の行様の事、いか様にあそばされべく候哉。いかほども案じ返し案じ返し、よき付合など引合て、うつくしく長高くあそばさるべく候」

「面^{おもて}の行様の事、口惜事共取出しもとめられては如何にて候。かるがるとうつくしく御さたあるべく候哉」

と述べ、百韻の付合がよく全体の調和を生み出しているようにすべきだと説いているのである。その美はまず第一に平淡で優美でなければならなかったのである。小西甚一氏は日本詩人選「宗祇」において「花やかな優美さが宗祇風における特色だろうと思われる」と述べておられるが、これは「かなりの反撥を呼ぶかもしれない」ほどの見解でもあるまい。

宗祇はまた連歌における修行ということを説いているが、これは心敬における、「当来の一大事をも悟りし」るべき修行ではなくして、「老のすさび」にのべたごとくいかに付句を言葉の上で「よくつけ」るかという、あくまで連歌作法の上でのそれであった。宗祇の連歌論は、風体論にしてもその表現論にしてもつまりは古典の伝統、和歌の表現世界を寄合の枠としていたの

であって、そこに独自の理論が展開されていないかに見うけられるが、その調和のとれた美、平淡な優美さを追求する努力と信念は宗祇の多くの連歌論書、指南書に溢れているのである。

三

以上私は心敬と宗祇の連歌論の特色のみをかいつまんで述べたのであるが、次に両者の独吟を掲げて、それを分析していくことにする。なお各句の末に句材の分析を私註として掲げた。

賦山何連歌百韻（心敬独吟）

（国会図書館蔵・古代連歌集）

初オ

（私註）

- | | |
|-------------------|-------|
| (1) 時鳥聞しは物か富士の雪 | 夏 降 鳥 |
| (2) 雲もとまらぬ空の涼しさ | 夏 聳 |
| (3) 月清き光りに夜半の風見えて | 秋 夜 |
| (4) 夢おどろかす秋のかりふし | 秋 夜 |
| (5) 置増る露や宿りに更ぬらん | 秋 夜居降 |
| (6) 虫の音よわき草の村雨 | 秋 降植虫 |
| (7) 萩が枝の下葉残らず寒き野に | 秋 植 |
| (8) 行人まれの岡野辺の道 | 人 |

初ウ

- | | |
|--------------------|-------|
| (1) 冬籠る棊の庵は閑にて | 冬 居 山 |
| (2) 氷るばかりの水ぞ消ける | 冬 |
| (3) 折しぼれ浅川渡る旅の袖 | 旅 水 |
| (4) 棹のしづくもかゝる船道 | 旅 水 |
| (5) 求つゝ寄瀬もしらぬ中はどうし | 恋 水 |
| (6) 別の駒はひきも帰さず | 恋 |
| (7) うつり行時を今宵の恨にて | 恋 夜 |
| (8) 契りにわたる有明の月 | 秋 恋 夜 |
| (9) 世の中や風の上なる野辺の露 | 秋 降 |
| (10) 迷ひうかるゝ雲きりの山 | 秋 聳 山 |
| (11) 鳴鳥の梢うしなふ日は暮て | 春 鳥 |
| (12) 物さびしさぞ桜ちる陰 | 春 植 |
| (13) 古郷の春をば誰か問て見む | 春 人 |
| (14) 霞隔つる方はしられず | 春 聳 |

二オ

- | | |
|--------------------|-------|
| (1) 武蔵野は通ふ道さへ旅にして | 旅 |
| (2) 詠し跡の遠き山陰 | 山 |
| (3) 我身世に思はず経ぬる年はうし | 無常 人 |
| (4) はかなや命何を待らん | 述 |
| (5) 矢はぎにも妻とふ鹿はイみて | 秋 動 |
| (6) 秋草しげみしらぬ人影 | 秋 植 人 |
| (7) 塩たるゝ洲崎の蟹の放庵 | 居水人 |

- | | |
|----------------------------------|--------|
| (8) 苦茨ふねに波ぞならへる | 水 植 |
| (9) 降雪に友なし衝打わびて | 冬 降 鳥 |
| (10) ひとりや寐なん小夜の松風 | 恋 夜 |
| (11) 問れずば身をいかにせん秋の空 | 秋 恋 人 |
| (12) たのめ置つる月の夕暮 | 秋 恋 |
| (13) 難面も露の情は有ぬべし | 秋 恋 降 |
| (14) 袖に時雨の冷しきころ | 秋 降 |
| ニウ | |
| (1) 山深み雪の下道越かねて | 冬 降人 |
| (2) 岩ほの陰にふせる旅人 | 旅 人 |
| (3) 夏ぞうき水に一夜の筵かせ | 夏 水 夜 |
| (4) 江の松が根につなぐ釣舟 | 水 植 |
| (5) 暮懸る難波の芦火焼初て | 水 |
| (6) かれいひ急ぐこやの衰さ | 述 居 |
| (7) 侘ぬれば涙しそゝぐ唐衣 | 恋 |
| (8) 恨なりけり人の偽り | 恋 人 |
| (9) 我しらぬ事のみ余所に名の立て | 恋 人 |
| (10) とひし其夜は夢かうつゝか | 恋 夜 |
| (11) 帰るさは心もまどひ目もくれぬ | 恋 |
| (12) 青葉かなしき花の山道 | 夏 山 |
| (13) 古郷に野分独りや答ふらん | 秋 居 |
| (14) かり寐の露に物思ふころ | 秋 夜 降 |
| 三オ | |
| (1) 袖ぬらす山路の月に夜は明て | 秋 夜 山 |
| (2) 雲ひく峯に寺ぞ見へける | 聳 山 |
| (3) 面影や我立 ^(ママ) 杣の跡ならん | 積 |
| (4) 蓬が嶋の花の木もなし | 春 植 |
| (5) 春深み緑りの苔に露落て | 春 降 |
| (6) 岩こす水の音ぞかすめる | 春 水 |
| (7) 磯がくれ波にや船の帰るらん | 水 |
| (8) 我思ひねの床も定めず | 恋 夜居 |
| (9) 夢にだに希に見えんと楽しみて | 恋 夜 |
| (10) かこつばかりの手枕の月 | 秋 恋 |
| (11) あぢきなくむせぶや秋のとがならん | 秋 恋 |
| (12) うへずば聞かじ萩の上風 | 秋 植 |
| (13) 春を猶わすれ記念に袖ほさで | 春 |
| (14) かすみ仇なる跡のあわれさ | 春 聳 |
| 三ウ | |
| (1) 淡雪の消行野辺に身をも知れ | 春 述降人 |
| (2) 人も尋ぬ宿の梅が香 | 春 居 人植 |
| (3) かくれ住谷の戸山の陰さびて | 山 |
| (4) けぶりすくなく見ゆる遠方 | 聳 |

(5) 水にうく鳥の一声打霞	春	水	鳥
(6) 船よばふなり春のうらゝさ	春	水	
(7) 面白き海の干瀉を遠く来て		水	
(8) 月のいりぬる道はしられず	秋	夜	
(9) くらきよりくらきを思ふ秋の夜に	秋	夜	
(10) 霧ふる野里秋の山里	秋	居山	聳
(11) 身を安く隠し置べき方もなし		無常	人
(12) 治れとのみ祈る君が代			人
(13) 神の為道ある時やなびくらん			神
(14) 風の前なる草の末々		植	
名オ			
(1) 冬の野に溢んとする露を見て	冬	降	
(2) はらはじ物を衣手の雪	冬	降	
(3) 積り来る人ゆへ深き我思ひ		恋	人
(4) いく夜かたゞに明し終らん		恋	夜
(5) 有増を寐覚過れば忘れ来て		恋	夜
(6) 月にも恥ず残る老が身	秋	述	夜人
(7) 吹風の音も厚顔秋の暮	秋		
(8) むかへばやがて消る薄霧	秋	聳	
(9) 道わくる真砂の上の打しめり		旅	
(10) ふるき庵りぞ涙もよほす		述	居
(11) 橘の木も朽軒も傾きて		居	植
(12) とふ人まれの五月雨の中	夏	降	人
(13) 瀬を早み夕川舟や流るらん		水	
(14) とまらぬ波の岸をうつ声		水	
名ウ			
(1) 山吹の散ては水の色もなし	春	水	植
(2) 八重をく露も霞む日の影	春	降	
(3) 春雨の細にそゞ此朝	春	降	
(4) おもひくだくる衣々の跡		恋	
(5) 恋しさのなくて住世も有物を		恋	
(6) いかにしてかは心やすめん		恋	
(7) 月夜にも月を見ぬ夜も伏侘て	秋	恋	夜
(8) 風潮寒く稲葉もる床	秋	居水	夜植

淀渡百韻（宗祇独吟）

（静嘉堂文庫蔵・連歌集書）*

初オ	（私註）		
(1) 嵐にも春たつ梅の匂ひ哉	春	植	
(2) 雪きえ松のあらはるゝ色	春	降	植
(3) 月のよは霞むにいとゞ春冴て	春	夜	聳

- | | | |
|------|------------------|-------|
| (4) | 明ぬとしるく鐘ひゞく也 | |
| (5) | 旅ねする枕に残る夢もなし | 旅 |
| (6) | よそにて猶も都恋しき | 旅 |
| (7) | 行かれて宿とひかぬる此夕 | 旅 居 |
| (8) | はるかにのぞむ里は遠しも | 居 |
| 初ウ | | |
| (1) | 風絶て森の梢のうち煙 | 植 |
| (2) | 塩やくならし浦の一方 | 水 |
| (3) | なれぬまの須磨の磯辺の月をみて | 秋 夜 水 |
| (4) | 遅く明石のすまる夜長き | 秋 夜 |
| (5) | 露はきえ霜また園の上枯に | 秋 降 |
| (6) | 人目を忍ぶ袖やはすらん | 恋 人 |
| (7) | とはれでも猶絶ぬこそ恨なれ | 恋 |
| (8) | すむぞとおもふ同じ世中 | 述 |
| (9) | 竹細き笥の水も少きに | 植 |
| (10) | なれての後もすごき山里 | 山 |
| (11) | いつも吹松風つらき花散て | 春 植 |
| (12) | 春の夢こそやがて覚ぬれ | 春 夜 |
| (13) | 今朝よりは日永きさへの暮ぬるに | 春 |
| (14) | 定めなくと老はいく程 | 述 |
| 二オ | | |
| (1) | あらましを末にのぶるは身をしらで | 述 |
| (2) | めざめがちなる秋のさむしろ | 秋 夜 居 |
| (3) | 終夜かたしく袖は月もなみ | 秋 夜 |
| (4) | 尾花に露のかゝる松陰 | 秋 降 植 |
| (5) | 野風吹入江の波の音荒て | 秋 水 |
| (6) | 難波のこやの蘆のかり萩 | 秋 居 植 |
| (7) | 住かへて都の跡のいやしきに | 述 |
| (8) | 今数ならぬ人のいにしへ | 述 人 |
| (9) | 思ひ出は後の憂身の涙にて | 述 |
| (10) | ふる程だにも世やのがるらん | 積 |
| (11) | 月に又ふらぬ方なる時雨 | 冬 夜 降 |
| (12) | わきて明ぬるはつ雪の山 | 冬 山 降 |
| (13) | 夜船には浦より不二の先みえて | 夜 旅 水 |
| (14) | 沖かとおもふみほの松原 | 水 |
| 二ウ | | |
| (1) | くもる日やいらぬさきより暮ぬらん | |
| (2) | 待べきときもかはるいつはり | 恋 |
| (3) | 我もはや思ひこりぬるつらさにて | 恋 人 |
| (4) | わかれのあらばとはれずもがな | 恋 |
| (5) | 逢せなど恨になしていそぐらん | 恋 |
| (6) | 夢のなごりのやがてはつ鳥 | 夜 鳥 |

(7) 明行を 花 としらで関越て	春	植
(8) 山賤ながら住はさくら戸	春	居 人
(9) 数ならぬ身をさへ春はとふ物を	春	述 人
(10) 心はとしのつもるともなし		述
(11) 鏡にも袖にはらはぬ雪ふりて	冬	降
(12) 池にも波のたつるうき鳥	冬	水鳥
(13) 有明 の水なるげも薄氷	冬	水
(14) うちとけがたき人のつれなさ		恋 人
三オ		
(1) 文をなど結びしまゝにかへすらん		恋
(2) 見もせぬ中のいかゞ恋しき		恋
(3) 思ひゆへうはの空なる心にて		恋
(4) なみだにふるも雨は夕ぐれ		述 降
(5) 身を知に明日とはいかで頼むらん		述
(6) うき時やがて世をいとはばや		積
(7) 墨染になさん便の袖ぬれて		積
(8) 衣をかへす秋はとまらん	秋	
(9) 月をみてこと浦迄もこぐ船に	秋	夜 水
(10) なくにやつるゝよるの雁がね	秋	夜 鳥
(11) 涙落露吹萩の風ふきて	秋	降 植
(12) 一葉もつもる古郷の庭	秋	居 植
(13) 塵ならぬ憂身はかるくもたれぬに		述 人
(14) 交る友は親子なるべし		人
三ウ		
(1) 疎からず生れあふさへむくひにて		積
(2) ともにおもふをなど恨らん		恋
(3) 待けりときてみる袖のぬれ衣		恋
(4) 無名になさであふぞ嬉しき		恋
(5) もしやとて尋る雲に 花 咲て	春	聳 植
(6) いそげば末の山もかすまず	春	山
(7) 春の日の跡遠くきて暮る野に	春	
(8) 永くはとぬ旅の道づれ		旅
(9) 木隠は一むら雨をよもしらじ	秋	降
(10) 風ものこらぬ蘆のはの落	秋	植
(11) 磯波は月も岩越汐みちて	秋	夜 水
(12) 近き千鳥の夜寒なる声	冬	夜 鳥
(13) 夢覚る枕や跡になりつらん		夜
(14) 又ねだになけ今朝の別路		恋
名オ		
(1) 言のはも涙も人をとめかねて		恋 人
(2) かたる恨をみえぬ面影		恋
(3) 朽木にも昔は咲し 花 ぞかし	春	植

(4) 柳は春の風とふくらん	春	植
(5) 秋の日の心に永き月待て	秋	夜
(6) こぞのわかれの星合の空	秋	夜
(7) まれなれば船路や遠き天川	秋	夜
(8) 紅葉のはしに何となすらん	秋	植
(9) わび人のわたるたよりも無世にて		述 人
(10) 薪つきてはかはる山みち		山
(11) 木隠の浅きは雪やつもるらん	冬	降
(12) かれ野にのこる松の曙	冬	植
(13) 里なきもよしや一夜の草枕		夜旅居
(14) かりねやしばし憂身成らん		述
名ウ		
(1) けふは暮ぬ泪の果はよもしらじ		述
(2) またじといひてなどや恋しき		恋
(3) 忍ぶ中とはれずとても恨なよ		恋
(4) われのみならず名こそおしけれ		恋 人
(5) 誰とても月にや雲を思ふらん	秋	夜聳
(6) おなじ夜寒の時雨松風	秋	降 植
(7) 山遠く里の木葉の秋更て	秋	山居植
(8) 谷にかくれし人ぞかしこき		人

慈鎮和尚の御歌に、我恋は心つくしへ行船の淀の渡の曙の空 と有如くに、筑紫へ下らん人もいまだ淀の渡をしるべと下るべけれと、又連歌にも悟入べき物なれば、此歌の心を以て作る故にやがて淀の渡と名付たり云々。

* この「淀渡百韻」は連歌学書「淀渡」に見られる句とほぼ一致しているのであるが、やはり異った点は異ったものとして、そのまま用いることにした。

(つづく)